

# Taarof (ターロフ) 場面における談話管理：ペルシア語母語話者と日本語母語話者の接触場面と内的場面の比較から

## Discourse management in Taarof situation: Comparing internal and contact situations between Iranians and Japanese

アキバリ・フーリエ(千葉大学, 人文社会学研究科)

Hourieh AKBARI(Chiba University,

Graduate School of Humanities and Social Sciences)

### Abstract

This paper discusses problems caused by "Taarof" in contact situations between Iranians and Japanese. Taarof can be explained as a set of honorific expressions including verbal/nonverbal and fixed/unfixed polite address. A total of 15 Iranian and Japanese examinees played a role in 5 different internal and contact situations in which Taarofs were thought to appear. The analysis of their mutual behavior showed that turns with Taarof were composed of adjacent pairs and a total of 25 adjacent pairs were observed in Taarof situations. In internal situations, it was revealed that Japanese examinees did not give expected replies to Taarof because they were unfamiliar with it, while Iranians consistently responded to Taarof in a predictable manner.

### 1. はじめに

従来の日本における接触場面に関する研究は、近隣の中国や韓国などの国々がその主な対象であった。しかし、近年特にグローバル化する社会において、これまで研究対象の範囲としてはあまり重要視されてこなかった国々も今後は視野に入れていく必要がある。特に地理的に離れている国の人々の間では、互いの見慣れない習慣や文化的背景の理解が困難になると考えられるため、そうした研究の重要性も大きいと言える。

著者の母国であるイランは、昔から日本と親密な関係を保っており、2013年12月末の日本政府による法務省の統計では日本における合法滞在者が3,971人であり、イランと日本の間に査証相互免除協定が存在した1979年から1992年までの期間には、20万人に及ぶイラン人が日本に中・長期滞在していた。彼らの多くは、日本で結婚し新しい生活を始めている。また、イランの日本語教育機関においても2013年度の国際交流基金の統計では245人の学習者がおり<sup>1</sup>、毎年その数は増加しつつあり、彼らは学んだ日本語を将来に活かしていくことが期待される。両国民の間ではこのように日々交流が行われているにもかかわらず、これまでの研究では、イラン人(ペルシア語母語話者)と日本人との接触場面という観点から両国の問題を分析、考察している例は見られない。

本研究では、特に両国の文化で重視される儀礼的場面を対象に考察を行った。ゴッフマン(1986:xi)によれば、人々による対面状況は、そこに共に暮らす人々が状況にふさわしいふるまいをすることによって維持される。さらに、状況にふさわしい相互行為は、人々が場や状況にふさわしくあるための「配慮」(敬意とふるまい)によって支えられており、そうしたひとつの道徳的な要請

を保証しているのが「相互行為儀礼」なのである。

Hymes (1967, 1972)が指摘するように、文法的に正しい文を生成する言語能力だけではコミュニケーションはできず、場面や相手に応じて適切に言語を使用するコミュニケーション能力がなければならぬ。本研究の研究対象のような相互行為儀礼が認識される場面においては、発話相手に気を配り、場面の雰囲気や状況の調和を維持するために、言語・非言語表現の選択に悩まされることが多い。それが接触場面になるとなおさらである。

日本社会において儀礼的な場面でのコミュニケーション・ストラテジーがあるように、イラン人社会においても儀礼的な場面、相手に対し敬意を示したい場面でのコミュニケーション・ストラテジーがある。この独特な言語行動・非言語行動をも含む社会的言語行動を「ターロフ」<sup>ii</sup>と呼ぶ。儀礼が見られる接触場面で問題が発生すると考えられる主な理由がこのターロフ習慣である。

そこで本研究では、ターロフが起こると思われる接触場面での相互行為を分析の対象にし、ターロフの機能の特徴を発話の中で検討すると同時に、イラン人は日本人とのターロフ場面において言語行動をどのように管理しているのかを明らかにする。

## 2. 先行研究

ターロフの概念は、複雑であり様々な要素から成り立っている。ここではまず、儀礼的な場面でのターロフの位置付けを確認していく。相手に配慮するために、「場」の状況や「人間関係」を把握する必要があるターロフ表現行為は、待遇表現の枠組みとして検討されている。さらに、外国語で会話が交わされる接触場面での待遇表現の扱いに対し、非母語話者の不満が見られることがこれまでの研究結果でも明らかになっている(宮岡 2002, 井出 1986, 生駒・志村 1993 他)。以下では、本研究のキーワードとなる概念を従来の先行研究を参考に考察する。

### 2.1 儀礼的コミュニケーション

儀礼とは、その基本的な意味としては、一定の形式にのっとった規律ある行為・礼法のことである。まさに、ターロフ行為はイラン人の歴史的な習慣・行為である。Tambah(1985: 128)は、儀礼とは「文化的に体系化された象徴的コミュニケーション」(“a culturally constructed system of symbolic communication”)だと述べている。そのさい、特定の社会構造の中で生きる社会の構成員は、儀礼を通して社会的アイデンティティを確認、再確認する (Malinowski 1922 ; Radcliffe-Brown 1922)。儀礼が体系化された象徴的コミュニケーションであるとすれば、そうした儀礼が成り立たない接触場面において象徴的コミュニケーションによって確認されるアイデンティティをどのように管理しているかが課題になる。

また、杉島(1997)は、儀礼的コミュニケーションを機能主義的アプローチと象徴論的アプローチのふたつに区別している。本研究は儀礼的コミュニケーションの機能に注目し、機能的アプローチを取る。機能的アプローチでは、儀礼を行うことが社会や個人にとってどのような役割をはたしているかという問題が重視される。また、イラン人社会で広く普及しているターロフが存在しない接触場面では、相互行為による個人の言語管理に重点を置く必要があると思われる。

### 2.2 待遇行動

イラン人の待遇行動では、発話者はターロフを使うことで、相手に対して敬意やポライトネスを示すなど、相手に対しての気配りや思いやりを見せることができると考えられる。

社会学者である Beeman(1986)は、数年間にわたるイランの現地調査の結果、ターロフがイラン人の儀礼的コミュニケーション・ストラテジーであることを明らかにし、ペルシア語には互いに礼儀を示す根本的な思想としてふたつの理論があると主張している。まず(1)Self-Lowering：謙遜語や謙讓語のような動作を行う人の行為を相対的に低め、その動作を受ける者(受け手)を高める。(2)Other-raising：相手を立て尊敬する行為であり、この二つの形はペルシア語の名詞や動詞にも影響し、変形を及ぼすと述べている。例えば、謙讓語名詞(呼称)、謙讓語動詞、尊敬語名詞、尊敬語動詞がそれぞれ儀礼的な場面で使われている。Beeman が挙げているこれらいくつかのペルシア語待遇表現の例は、どれもターロフが現れると想定される場面で見られる言語表現である。

- a. 謙語名詞(呼称)：Bande/Haghir(小生)/Chaker(謙遜な)/Mokhles/(私⇒私ども)
- b. 謙讓語動詞：Goftan⇒Arz Kardan(言う⇒申し上げる), Amadan⇒Be Khedmat Residan(行く⇒伺う)
- c. 敬語名詞(呼称)：Jenabeali/Shoma/Sarkar…(⇒あなた, 貴方, あなた様)
- d. 尊敬語動詞 Goftan⇒Farmudan(言う⇒おっしゃる), Khordan⇒Meil kardan(食べる⇒召し上がる)

ペルシア語と同様に、日本語にも多くの待遇表現が存在しており、日本語学習者がこれらの言語行動の理解に頭を悩ませていることが従来の研究から分かる。蒲谷他(2002: 15)によれば、「待遇表現」とは、「表現意図」をもった「表現主体」が、「自分」と「相手の人物」の相互の「人間関係」や「場」を認識し、「表現形態」を考慮した上で、「題材」と「内容」を選択し、適切な「言材」を用いることによって「文話」を構成し、「媒材化」(音声化・文字化)する一連の「表現行為」である。ここで蒲谷が指摘した「待遇表現」の定義は、Beeman が述べるペルシア語のターロフ場面での言語表現においても「表現行為」に至るまでの「人間関係」や「場」における認識などが、「待遇表現」が現れる場面の特徴として見られる。

一方、吉枝(1994: 84)は、ターロフの定義として、待遇表現の一種、敬語、謙讓表現や定型表現等の言語表現に加わり随伴行動としての非言語表現までの幅広い範囲にわたる行動様式であると述べており、ターロフにかかわる要素に非言語行動を追加している。ターロフには、決められたニュアンスやフレーズが多く存在しており、イラン人母語話者の発話には、日本人と日本語によるコミュニケーションであってもターロフの行動が日本語以外の要素に現れる可能性があるかと予想される。

最後に、Canale(1983)は、言語コミュニケーション(communicative language competences)を支えるコミュニケーション言語能力は3つの要素「言語構造的な能力」「社会言語能力」「語用能力」から成り立っていると述べている。本研究はなかでも、相手との関係や場面に応じて適切に言葉を使う能力を指す「社会言語能力(sociolinguistic competence)」に焦点を当てる。従って、待遇表現や儀礼的コミュニケーションは社会言語能力の一部であり、会話相手とただ発話することが要求されているのではなく、社会の中で、どこで誰にどのような言葉遣いをするのが適切であるのか、という能力を身に付けることが求められる。

### 2.3 接触場面とターロフ研究

今後の研究の課題になるのは、問題提起されたコミュニケーション能力をどのように学習者に提示するかということである。またそれ以前に私達は、実際の文化間の場面(接触場面)において、どのような問題が生じているのかを検討していく必要があるだろう。異文化間の接触では、単に文化同士の接触が起きているだけではない。同じ文化をもつ者同士の場面(母語場面)では見られない特徴が接触場面には多く見られる。接触場面と母語場面のインターアクションを分析することで、様々な問題点が見られ、解決策が得られると考えられる(ネウストブニー1995)。

過去の研究状況をみると、イランや他国の研究者はこのターロフ場面の問題に気づき、研究を行っている。その主な研究内容は、内的場面に注目しターロフの機能を考察するものである。イランは多民族国でもあり、トルコ、クルド、アラブ系など地域によっては、習慣が異なる場合もあるが、ターロフはイラン国民の国民性が顕著に現れるコミュニケーション・ストラテジーであるので、ターロフ習慣はイランのどの地方でも見られると多くの研究者は述べている (Alirezai2007; Faramarz2011; Najafi2009)。このことは、調査協力者を対象にする際、イランのどの地域からであってもターロフに対しての認識が同一であると見なせる。

一方で、外国人とのターロフの接触場面を考察している例は過去にも少ない。会話分析の視点からの考察ではないが、Simin(2001)は、ターロフは他国の人々にとって理解しがたく、混乱するものであると述べている。近い文化背景をもったイランの隣国トルコでさえも、イラン人のターロフの定型表現や態度は理解しがたいという調査結果が見られる。また、Sofia(2002)は、イギリス在住のイラン人と、イランの首都テヘランのイラン人を対象に、ターロフ場面におけるペルシア語の申し出や感謝表現の調査を行い、イラン人側からターロフが始まる接触場面においては、ペルシア語非母語話者であるイギリス人はイラン人が期待している応答をしないと述べている。このように、イラン人は外国人との接触場面においても母語規範の習慣に従っていることが把握できる。このことから、おそらく日本人日本人との接触場面でも同様な結果が見られると推測できる。

一方、Shardad(2002)では、合計 220 人のイラン人男女学生と、27 人の大学の教師を対象に、英語で依頼の文章を書かせたところ、英語であるにもかかわらずターロフの表現を用いることが明らかになった。そしてその特徴として、はっきり物事を言うのではなく、bad, good のかわりに if, would, maybe など曖昧な表現が多く使用される傾向が見られることを挙げている。このように、イラン人の文化に浸透しているターロフは、外国人にはなかなか理解しがたい部分であり、またイラン国外在住のイラン人も、ターロフの習慣がない国々では、どのように振る舞うべきか悩まされているようだ。

異なる文化や慣習背景を持っている者同士が、ともに社会生活を歩み、非母語話者と意思や感情、思考を伝達し合い、最終的な目標としている円滑なコミュニケーションの維持をするためには、互いの儀礼を理解しそれに対して自己をうまく調整することが求められるだろう。

### 3. 調査方法

#### 3.1 調査の概要

調査は自然な会話に一番近い発話が得られるロールプレイにより行われた。

予め、事前にロールプレイの場面設定のための予備調査として、日本人との接触場面を何度も体験しているイラン人と、イラン人との接触場面を何度も体験している日本人を対象に、アンケートとインタビュー調査を行った。1回目のアンケートでは、実際どこで不満を感じているのかを考察するために、「イラン人と日本人の接触場面におけるコミュニケーション上の問題は何かと考えるか」という点を中心に回答してもらった。その結果、イラン人のターロフと呼ばれるコミュニケーション行動が、接触場面で問題となることがしばしばあるということがわかった。2回目のアンケートでは、質問をより細かくし、「実際にイラン人(または日本人)とターロフがおこる場面で問題に直面したことがあるか」など具体的な質問をした。以上2回のアンケートを参考に、ターロフが

起こりそうな場面を5つ設定し、15人の被験者にロール・プレイを依頼した。それぞれの場面をビデオカメラで録画し、撮影後、会話の文字化を行った。なお、今回資料の文字化で参考としたのは、宇佐美(2011)の「基本的な文字化の原則(BSTJ)」である。

文字化後、一週間以内に各被験者にフォローアップ・インタビューを行った。インタビューは被験者と同席、もしくはインターネットを通じて口頭で行い、この他にも録音後に、調査者と協力者で場面の設定や内容、またターロフについて話し合う機会を設けた。これらのインタビューは全てICレコーダーによって録音された。

### 3.2 調査協力者

本稿で扱う調査対象者は、15名となる。うち5名は日本語母語話者、他10名は日本在住のペルシア語母語話者である。調査の協力者になった日本語母語話者の年齢は23歳から26歳で、そのうち3名は大学生である。したがって、接する態度や発話行為などの位相差は小さいと考えられる。

ペルシア語母語話者は大きく2つのカテゴリーに分けた。ひとつは日本語が流暢に話せるグループで、もうひとつは日本語を上手く話せないグループである。年齢層は20代半ばから30代前半である。うち8名は現在日本に留学している者で、滞在地域は首都圏である。

なお、日本語が流暢に話せるグループの選定基準としては、“国際交流基金のCan-do”自己評価リストを参考にし、A1～C2の14段階の内、最低でも、B1レベルに相当するものを選出した。ただし、著者による判断であるため、厳密さには劣る。滞日歴は、特に制限を設けていないことから、ばらつきが見られる。幼い頃に日本に移住し、日本で博士号を修得した者や、母国で日本語を学んでいた経験があり、日常会話や簡単な読み書きができてから日本に留学しているため、半年しか日本に滞在していないが、日本語レベルは中級の者もいる。

### 3.3 場面設定

上述したように、前もってイランと日本の両文化に触れた経験のある者にインタビュー調査を実施し、その回答を参考にロール・プレイの場面設定を行った。

予備調査の結果、予想通りイラン人側も日本人側もターロフが起こる接触場面において問題や違和感を抱いていることが明らかになった。以下が設定した5つのロールプレイの場面である。

表1：各場面における被験者の組み合わせ

場面	組み合わせ (接触場面)		組み合わせ (内的場面)		関係	機能	内容
	IR	JP	IR	IR			
1	IR01	JP01	IR01	IR02	生徒・教師	感謝	「お金のお支払場面」
2	IR02	JP02	IR03	IR04	会社の同僚	誘い・断り	「パーティへの誘い」
3	IR03	JP03	IR05	IR06	昔の友人	感謝・褒め	「家でのパーティー」
4	IR04	JP04	IR07	IR08	店員と客	お金の交渉	「香水の買い物」
5	IR05	JP05	IR09	IR10	部長と部下	依頼・褒め	「休暇の許可」

### 3.4 ターロフ行動の抽出

著者はターロフの定義を「場面性」と「発話性」の2つの視点から考えた。

すなわち、ターロフが現れるか否かは場面に大きく左右されており、決められた多くのフレーズが発話中に現れることで、ターロフをしているのだと判断する。

#### (1) 「場面性」

まず、「場面性」とは、場面によってコミュニケーションスタイル、使用されるフレーズやインターアクションが異なってくるということである。二つ目は「発話性」の観点であり、これは発話で使用されるコミュニケーション手段である。それぞれ言語管理が必要とされる。

以下は、場面性からターロフの定義を見たものである。特定の発話行為が以下のような場面で現れると、ターロフが起きたとみなされる。

(1)互い知り合う場面、自己紹介場面、(2)会話の最初と最後に交わす挨拶、(3)パーティや晚餐会で客や相手に対してのおもてなしやそのための事前の準備、(4)家に誰かを招待する、(5)礼儀正しく改まった申し出、(6)発話者に属するものの提供、(7)儀礼的あいさつ、(8)場面や発話中にポライトネスが想定されたと判断される、(9)相手の領域に属するものを褒める。

ターロフが起きる場面は他にも想定できるが、本調査では以上の場面を対象にした。

#### (2) 「発話行為」

次にターロフに関係する「発話行為」を考察の対象にした。会話分析をするにあたって会話内での発話に注目をする。特に、以上のように状況によって、ターロフは相手のために自分を困難な状況におき、または自分を難しい状況に巻き込むことであると著者は想定している。

1. 会話上、本来の気持ちとは反対の行動を習慣化する。(例)発話相手(ホスト)の家に招かれるが、招かれた者(ゲスト)は自己の気持ちと反面にホストの誘いを単純に受け入れない。
2. 必要とされる以上に発話相手に示す感情提示。
3. 通常に交わしても良い挨拶だが、あえて自分の感情や相手に対しての気配りやおもてなしをオーバーに見せ、相手への敬意を示し相手を立てる。

以上のようなインターアクションまたは発話が相互行為の中で見られれば、そこではターロフが起きていると判断することができる。また、会話内でターロフ表現は連鎖的に見られることから、複数回の発話連鎖が起きる場合はターロフがおきているとみなす。

#### (3) 「定型表現」

一方、ターロフ場面の他の特徴としては定型表現が多く存在することである。定型表現が会話で使用されれば、相手への配慮・気配りがなされ、ターロフがおきていると理解できる。例えば次のようなフレーズの出現をもって、ターロフが起きたとみなすことができる。これらの定型表現は本研究の調査で見られた代表的なフレーズである。

感謝場面：kheili Mamnun(本当にありがとうございます),Lotf Darin(ご親切に),Zahmat Shod(ご迷惑をお掛けしました),Motshakeram(心から感謝しています)など。

挨拶場面：Khubi?(元気?),Cheshme ma roshan(お会いできて目が輝いた[お会いできて嬉しい]),Moshtaghe didar(会いたかったよ)など。

褒め場面: Be lotfe shoma(あなたのおかげです),Mashallah(素晴らしいですね),Kheili Aalie(最高)など.

謙遜場面: Ghabeli nadare(大したものではありません),Ma Kari nakrdim(大したことしていません)など.

## 4. 分析結果

本節ではこれまで定義したターロフ場面で、日本語を話すペルシア語母語話者はターロフ場面に直面した場合、どのように日本人や日本社会の慣習に合わせて言動しているのかを検討する。同時に、同じ場面でイラン人と会話する際どのように異なる発話行為が出現するのかを考察する。内的場面と接触場面における話者の立場や地位差、使用される定型表現、および非言語的行動を発話者のターンごとに細かく考察していく。

### 4.1 内的場面と接触場面のロールプレイ会話における傾向

#### 4.1.1 内的場面と接触場面の談話の長さ

本研究ではターロフ場面における接触場面と内的場面の談話の長さに大きな違いがみられた。場面(5)を除き全ての場面で、内的場面のほうが接触場面より発話時間が長く、特に場面(3)「友人の家で」では内的場面が接触場面より10分20秒も長かった。

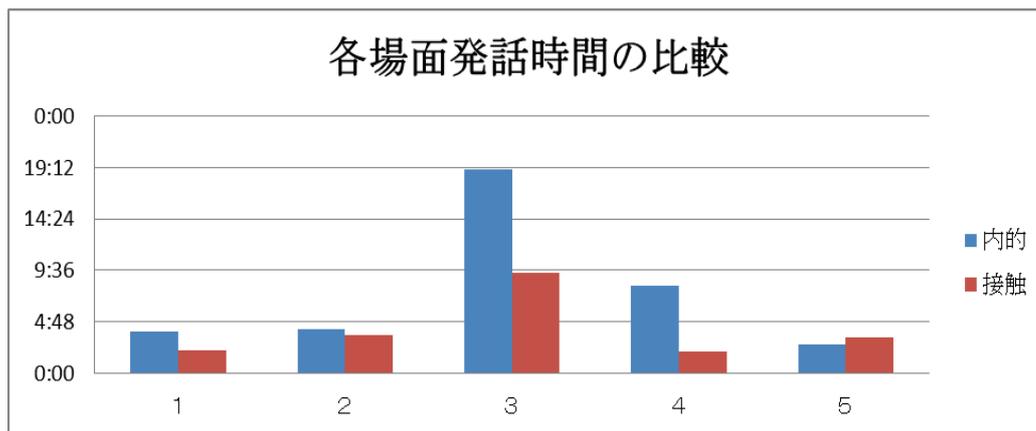


図1: 内的場面と接触場面での発話時間(単位:分)

例として、場面(2)「会社の同僚と話している」場面の接触場面と内的場面を、最初の挨拶の談話を比較して見てみる。

#### 【例1】接触場面 - 最初の挨拶

発話番号	話者	発話内容	隣接ペア
1	JP02	お疲れ様です。	挨拶
2	R03	お久しぶりです) {}	挨拶
3	JP02	お久しぶりです) }。	挨拶
4	JP02	ここ座っても良いですか? [1]。	挨拶
5	R03	どうぞ、どうぞ[ちっと、しゃがみながら自分の席から礼儀として立ち上がる]。	挨拶-非言語的
6	R03	お久しぶりですねー。	挨拶
7	JP02	お久しぶりです[-]。	挨拶

会話終了後、フォローアップを行った結果、接触場面の日本人の被験者(JP02)は話の終わり目がよく分からないことが判明した。被験者(JP02)はもう会話が終わったと思ったのに、また相手が会

話を始めたので、いつ終わるのか困ったと報告した。これはイラン人の方の特徴なのか、(IR03)の特徴なのか分からないが、日本人とは違う調整をしていることが見られる。しかし、発話番号5番では、イラン人の母語規範で相手に敬意を示すため、日本人の同僚が挨拶した瞬間、敬意として席から少し腰を上げ非言語行動でのターロフが見られた。(JP02)はここでなぜ(IR03)が席から少し立ち上がったのか理解しなかったようだ。

【例2】(場面2-内的場面-始めの挨拶)

発話番号	話者	発話内容	隣接ペア
1	R04	こんにちは、[R03]。	挨拶-友人同士でも健康について話してあいさつ
2	R03	こんにちは-[声を高くして]。	挨拶
3	R04	どう?元氣-?。	挨拶
4	R03	=元氣だった?。	挨拶
5	R04	健康だよ。	挨拶
6	R03	ありがとう、よかった、元氣そうで。	挨拶
7	R04	君は?元氣かい、男?[友人同士男性で呼び合う表現]、[手で友達の背中をたたき]。	挨拶
8	R03	毎日どんどん、強くなってるね、手の力が- [人]で笑う。	挨拶
9	R03	うーん、最近はどう?何してるの?。	挨拶
10	R04	本当に嫌な会議だったなー、脳みそが食べられろうだったよー、部長のせいで- [疲れてる感じ]。	
11	R03	本当だよー。	
12	R04	何言ってるかわからないよー、何がしたいのかも、さっぱり分からない。	
13	R03	= 分からない人は分からないんだよー [人で笑い]。	
14	R04	残業代もれないのに、アンケートに答えるうって、ありえないよー。	
15-1	R03	そうだよな、俺は、。	
16	R04	どう、最近は?。	挨拶
15-2	R03	こうしたら、もうあまり真面目に仕事しなくていいと思うなー、本当だよー [笑い]。	
17	R03	健康だよ僕も、うーん、最近は別に特別なことはないよー。	挨拶
18	R04	<家族は元氣?> [ ]。	挨拶-礼儀として家族のことも聞く

その一方で、内的場面の被験者にフォローアップ・インタビューを行ったところ、特に会話が長く交わされていたとは感じていなかったと述べていた。しかし、明らかに同じ場面内容であるにも関わらず、イラン人同士は挨拶を繰り返している。本題に入る前に相手への儀礼としてこのような会話が習慣的に交わされる。

4.1.2 内的場面と接触場面のターロフの使用頻度

上で述べたように、本研究ではターロフとみなした発話を大きくふたつの視点から見ている。そのひとつは「場面性」、もうひとつは「発話性」である。例えば、最初の挨拶では、最初と最後に交わす挨拶がターロフ場面とみなされる。それ以外にも今回は、ターン数(発話行為)を基準として数えているので、ターロフと定義した定型表現が確認されればそのターンではターロフが起きるとみなす。

なお本章における頻度数とは、各場面で見られた全てのターン(発話行為)の中からターロフが起きている、あるいは起ころうとしている発話ターン数を、全ターン数で割ったものである。その結果、接触場面と内的場面で見られる「ターロフ頻度」は9%~38%の差がみられた。やはりここでも、日本人とイラン人でターロフの発話行為の連鎖が起こっていないことがわかる。また、フォローアップ・インタビューの結果から、イラン人の中にもあまりターロフ行為や発話をしない人がいることもわかった。場面(5)のイラン人被験者は、幼い頃から日本で育てており日本人社会のターロフがない環境に慣れているため、内的場面でもあまりターロフを続けていないことが分かる。場面(4)では、ロール・プレイ内容がまったく同じにも関わらずターロフの割合の差が最も見られた。そ

の理由としては、内的場面(4)で(IR08)が他のイラン人の被験者よりもターロフの習慣を好んでおり、頻繁にターロフを会話の中で連鎖していた。

**表 4：ターロフが使われている頻度**

場面	頻度数	割合	場面	頻度数	割合
内的場面 1	38/61	62%	内的場面 4	101/164	61%
接触場面 1	16/41	39%	接触場面 4	10/42	23%
内的場面 2	45/107	42%	内的場面 5	57/113	50%
接触場面 2	15/126	10%	接触場面 5	24/104	23%
内的場面 3	49/173	28%			
接触場面 3	24/141	17%			

#### 4.1.3 隣接ペアによる分析

今回のターロフ場面の会話を、内的場面または接触場面で分析すると、話者交替及び「状況の適切性」と並んで、エスノメソドロジストラ(Sachs, Schegloff, Jefferson1975)の研究でよく言及される「隣接ペア」がどの会話にも見られる共通点がある。本研究では 20 種類の隣接ペアが見られた。以下に「隣接ペア」の種類をあげる。

**表 5： 隣接ペアの種類**

1.挨拶－挨拶	11.提供－遠慮
2.ほめる－ほめる	12.提供－感謝
3.ほめる－拒否(謙遜)	13.感情提示－感情提示
4.ほめる－感謝	14.申し出－否定
5.謙遜－拒否(否定する)	15.申し出－ [ほめ+拒否]
6.謙遜－ [(感謝+ほめ)－拒否]	16.申し出－ [(感謝+ほめ)－拒否]
7.謙遜－応答(謙遜)	17. [感謝+ほめ]－申し出－ [拒否]
8.配慮表現－感謝	18.誘い－応答
9.提案－否定	19.誘い－拒否
10.感謝－謙遜(応答)	20.誘い－ [感謝+拒否]

(6), (15), (16), (20)は, [感謝+ほめ], [ほめ+拒否], [感謝+ほめ], [拒否+感謝]という形である。「隣接ペア」の第一成分(First Pair Part)または、第二成分(Second Pair Part)において、発話者の1つのターンに2つの行為が見られることを指している。全場面でこれら全てのペアが見られるのではない。場面によって頻出するペアやまったく見られないペアなど、ばらつきがある。ここで、二つの内的場面での隣接ペアを会話分析の観点を取り入れて紹介してみたい。

【例3】(9) 提案－否定

発話番号	話者	発話内容	隣接ペア
91	R08	じゃ、奥様とまた今度買いに来た時で[計算は次回で大丈夫]。	提案
90-2	R07	いや～、それは、また次の誕生日もあるし・それは、(でも) [↓]。	拒否
91	R08	(でも… [お金をもらうのは、悪い]これじゃ) [↓]。	提案
92	R07	また、子供達の誕生日もまだあるし・自分の誕生日だって、妻がここに買いに来るかも) [↓]。	強く拒否
93	R08	(でも、お金頂くのは…) [↓] [↓]。	謙遜
94	R08	それじゃ、お好きな値段で結構ですよ。	提案
95	R07	いや～それはできませんよ～[手をダメだという意味で動かす]。	拒否

この隣接ペアは、お金の交渉があった内的場面(4)で最もよく見られた。「お金はいらない」と友人である店員(IR08)が友人である客(IR07)に対してお金を受け取らなくて済むように様々な案を提案している場面の発話である。以下のような発話の連鎖は、店員が友人である客に敬意と思いやりを示すため、それを積極的に発話で表現している。ターロフの特徴が明確に現れているのは、発話番号91番である。(IR08)は、本音は友人からお金の精算を要求したいが、それでは自分の面子がつぶれると考えて困っていたと述べていた。

【例4】(11) 提供 - 遠慮

発話番号	話者	発話内容	隣接ペア
122	R06	ごめん話の途中に、食べてないから果物の味がかわっちゃうよ[←][どうぞ食べて下さいという意味]。	おもてなし提供
123	R05	ありがとう。	感謝
124	R06	皮むいてあげようか[↓] [↓]？。	おもてなし提供
125	R05	うんうん、そんなお手数かけないよ[↓] [↓]。	遠慮

この種の隣接ペアがよく見られるやり取りはイラン人同士のパーティ場面などが多い。ここでは、内的場面(3)でホスト(IR06)がゲスト(IR05)をもてなしている。122番の発話では提供に対して感謝しているが、124番の発話の会話では遠慮しているのが分かる。特に、このパターンではターロフの連鎖が見られる。よくターロフをする人であれば、ゲストが一回遠慮して断っても、ホストは納得いかず、何回も提供を繰り返す。

4.1.4 接触場面と内的場面における隣接ペアの使用状況

メイナード(1997)は、「隣接ペア」は「状況の適切性」(Conditional Relevance)を満たすある特殊な例と考えられ、第1ペア部分と第2ペア部分の発話の関係には、より良く期待に答えるものと、期待に反するものがあると述べている。したがって、通常会話における答え方に注目すると、「好まれる応答形式」(Preferred)の場合とそうでない場合とで、答え方に差があると言える。

内的場面と接触場面との差を以下のように分析を行った。マイナスで示す部分は、発話者の一方が相手の期待に添わない応答をしていることを示している。

場面(1)での隣接ペアの出現回数を例として考察する。



ながら発言をつなげることでであると述べている。「行為の連鎖」は、順番交代と同様に、私達が会話をしている時には、いつも気にかけていなければならない事であり、またそうすることで発言をつなげていく、すなわち「会話」を成立させることになる。

本研究では、5つの場面における発話行為を分析したところ、ターロフの発話連鎖を構成する9つの連鎖を確認した。例えば、感謝の意味で連続的に続いている発話行為、及びそこで発生しているターン交換の集合は「感謝場面での連鎖」とみなすことができる。このように抽象的な連鎖は感謝場面以外にも見られ、感情提示、褒める、謙遜、あいさつ、遠慮、誘い、申し出、提案が起きる場面も、「ターロフ発話行為」の連鎖とみなすことができる。

### 4.3 接触場面と内的場面のターロフ使用の質的分析

メイナード(2007)によると、エスノメソドロジーとは、会話分析での共通点をみつけ、会話が常に一つの順序に基づいて行われていることのヒントをいつも見つけるよう、努力する方法であり、この方法により、例えば、表現 Y の前にはどんな表現や行動 X があるのか、そしてその X の後にはどんな表現や反応 Z が続くのかということ、つまり「順序としてのコンテキスト」(Sequential Context)を会話の中で作ることができる。今回の分析では、以前にターロフの定義として述べた連鎖が上手く続くことを、「順序としてのコンテキスト」が成り立った状態とみなしている。各場面で次の図のようにコンテキストが成立した。ここでは、場面(2)を対象に表 8 のような簡易な質的分析を行う。内的場面での会話の流れは、「順序としてのコンテキスト」とみなす。

表 7：場面(2)の会話の流れと発話連鎖

連鎖状況	内的場面の会話の流れ	内容
挨拶の連鎖	↑ 挨拶	健康について
	↓ 挨拶	
	自分に属するものを提供	感情提示を入れながら
	受け入れ	
誘い+感謝+遠慮の連鎖	↑ 家に招く	感謝の気持ち強く強調
	↓ 否定	
	↓ 逆に家に招く	
	終わりの挨拶	感謝

連鎖状況	接触面の会話の流れ	内容
	挨拶	久しぶりなど
提供の連鎖	↑ 自分に属するものを提供	
	↓ 拒否	
	家に招く	1回だけその理由を尋ねる
	拒否	
	最後の挨拶	

場面(2)は、会社の同僚の会話である。発話連鎖の流れを見ると二つの顕著な特徴が挙げられる。一つ目はイラン人同士の内的場面では、相手を思い、感情提示や感謝そして褒める(相手を立てる)行為がロール・カードには書かれてはいないものの、繰り返し見られた。これは、ターロフ場面上手く成り立っていることを示している。二つ目は、場面(2)の接触場面では、イラン人被験者(IR03)が日本人の母語規範に合わせようと努力している様子が見られる点である。初めに日本人側(JP02)が「お久しぶりです」と挨拶を開始しイラン人もそれに合わせて応答している。ここで、最も連鎖が長く続いた場面、(ロール・カードには書かれていなかった)“友人を逆に家に招く”シーンの発話行為を見てみる。そして、接触場面との誘いの差を考察する。

【例6】：内的場面(2)

発話番号	話者	発話内容	隣接ペアー
68	R04	じゃ、来週、君が僕の家に来なよー、金曜日、来週の。	逆に誘い
69	R03	来週のー金曜日？。	
70	R03	来週の？【	
71	R04	]]ダメとかは言わないよー、必ず来るんだよー。	
72	R03	うーん、	誘い
73	R04	奥さんと子供たちと一緒に【	拒否
74	R03	]]個人的にはすごく行きたい、でも分からないからさー<笑い>。	誘い
75	R04	もーターロフとかするなよー、来てくれー。	拒否 気持ちを見せる
76	R03	いやーターロフじゃないよー本当にまだ予定が分からないからさー。	誘い
77	R03	どうなるかー、	拒否
78	R04	もう、今電話して聞いてー <笑い>。	誘い
79	R03	問題は一つじゃないから。	拒否
80	R04	おれは、今君からここで、来るってオッケーをもらうからさー<笑い>。	誘い
81	R03	いやー、ちょっと待ってくれー、明日のこの時間まで予定を教えるよー。	拒否
82	R04	ターロフするなよー。	誘い
83	R03	ターロフしてないよー<笑い>。	拒否
84	R04	俺たちは、こんな仲がいいんだからー。	誘い
85	R03	いや、神に誓ってターロフじゃないよー<笑い>。	拒否 強く強調
86	R03	準備を俺が全部するからー 待っているよーという意味。	
87	R03	90%以上の確率で来るからーただ、ちょっと確認いくつしてからー。	
88	R04	だって、君がこのドアから向うに行けばもう、会えないからさー逃げるなよー <笑い>。	誘い-とても来てほしいと強く強調

【例7】：接触場面(2)

発話番号	話者	発話内容	隣接ペアー
45	JP02	(土曜日でしたよね)】)。	
46	JP02	金曜日に、ちょっと、用事があるって、朝まであるんですよ。(で、こっちに)【。	
47	R03	飲むんですか？)】)。	
48-1	JP02	飲まないですけど、仕事で(金曜日)【。	
49	R03	(いや、正直に)】)言っても大丈夫です。	
50	JP02	いや、金曜日仕事でどうしても、遅くはななくちゃいけなくて。	
51	R03	はい。	
52	JP02	土曜日、帰ってこれるかどうかわからないんですよ。	
53	R03	本当ですか？。	
54-1	R03	あれは、別に来なくても来なくても、あれ、これなら、あの連絡、	軽い誘い
55	JP02	ん、これなら連絡します。	応答
54-2	R03	そうです。	
56	JP02	それで、大丈夫ですか??。	
57	R03	そうそう、ぜんぜん大丈夫です。	
58	JP02	来たら、必ず行きますね!。	
59	R03	はい。	
60	R03	僕みんな集まってるんで~あの、来たら連絡くれれば。	
61	JP02	分かりました。	軽い誘い
62	JP02	はい、じゃそれで。	対応
63	R03	はい。	
64	R03	あの、お酒強いですか？。	

(IR03)はどうか(JP02)を家に招待したいものの、どの角度から日本人を納得すればよいのか分からないが見られる。結局「できたら必ず行きます」と日本人の応答がかえってきてところで、誘いを終わらせている。また、62番で(JP02)が「はい、じゃ」と会話を終わらせたいが、64番で(IR03)が「あの、お酒強いんですか」と何か会話の流れでは物足りないのか、再びテーマを作り会話を始めた。

## 5. まとめと今後の課題

本研究では日本に滞在するイラン人を対象に、ロール・プレイ形式で、イランの独特の習慣とも言えるターロフ場面を対象に調査を行った。イラン人母語話者が、異なる文化背景を有する日本人母語話者とのターロフ場面でどのようなインターアクションが起きるのか、その特徴を考察した。

調査の結果、まず、これまでの先行研究では明らかにされなかった特徴を把握することができた。内的場面でターロフが起こる場面では、会話の発話者同士の間「隣接ペア」が成立した。つまり、被験者はイランでの母語規範を前提に上手く相手のターロフに応答していた。一方、接触場面では期待の応答が日本人側から返されなかった。次に、ひとつの場面での隣接ペアの繰り返し回数が、内的場面と接触場面で異なっていた。内的場面では、ターロフの定型表現が使用され、自然な連鎖が長々と続くのに対し、日本人はその規範を知らないため普通に応答をしていた。

今後は、ロール・プレイ形式ではなく自然場面での特徴を調査し、特に本研究で見られたターロフ場面の特徴が自然会話でも見られるのかに注目したい。今まで明らかにされていない、イランでの敬語行動の重要な構造要素となっているターロフに焦点を当て、イラン人がターロフと日本語の敬語表現や待遇表現をどのように区別し、使用しているのかを解明することを今後の研究対象としたい。

## 参考文献

- Aman Gharaimoghada (2009). (مردم شناسی فرهنگی) انسان شناسی فرهنگی چاپ سوم ، انتشارات ايجد
- Beeman, W. O. (1986). *Language, Status and Power in Iran, Bloomington*. Indiyana University Press
- Canale, M. (1983). From cominicative compitance to communicative language pedagogy. In Richards, J. C. & R. Schmidt (Eds.), *Language a Communication*. pp.2-27.
- Fan, S. K. C. (1994). Contact situations and language management. *Multilingua*. pp.13-3.
- Framarz (2011). بررسی مردم شناسی تعارف در فرهنگ ایلام Azaduniversity, Master Disseration.
- ゴッフマン, E. (1986). 儀礼としての相互行為 (広瀬英彦・安江孝司訳) 法政大学出版会
- Hymes, D (1967). Models of the interaction of language and social setting. *Journal of Social Issues* 23 2, pp.8-28.
- (1972). Models of the interaction of language and social life. In J. Gumperz & D. Hymes (Eds.), *Directions in Sociolinguistics*, pp.35-71. New York: Holt, Rinehart, Winston.

- 井出祥子 (1995). 語用論から見た敬語—わきまえ指標するモダリティ表現としての丁寧語 国文学解釈と教材の研究 40 (14), pp.10-17.
- 井出祥子 (1986). 日本人とアメリカ人の敬語行動—大学生の場合— 南雲堂
- J. V. ニューストプニー (1994). 日本語研究の方法論—データ収集の段階— 待兼山論叢 28 日本語学編 pp.1-24.
- J. V. ニューストプニー (1995). 日本語教育と言語管理 阪大日本語教育 pp.67-82.
- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵 (2002). 「待遇表現研究」における「仮説」(1) 国語学研究と資料 25 pp.14-25.
- 前田他 (2008). エスノメソドロジー 新曜社
- 宮岡弥生・玉岡賀津雄 (2002). 上級レベルの中国語系日本語学習者と韓国語系日本語学習者の敬語習得の比較 読書科学 46 (2) pp.63-71.
- 松木啓子 (2009). コミュニケーションにおける儀礼的諸相の再考察—「連帯」と「聖なるもの」をめぐって— 言語文化 12 (2) pp.345-368.
- Simin Daneshvar (2001). *Be ki Salam konam?* Entesharate Kharazmi. Chape5
- Sofia A. Loutlaki (2002). Offers and expressions of thanks as face enhancing acts: taarof in Persian. *Journal of Pragmatics* 34
- Sahragard, R. (2002). A cultural Script Analysis of Politeness feature in Persian pp.399-423
- Sarli Alirezai (2007). تعارف در فرهنگ ایران مناطق سیستان و بلوچستان Azad University, Master Dissertation.
- Somaye Najafi (2009). بررسی گونه های ادب و احترام در میان فارسی زبانان شهر مشهد. Ferdousi University of Mashhad, Master Dissertation
- 杉島敬志 (1997). 承認と解釈—プラクティスとしての儀礼と社会のかかわり— 青木保他(編) 儀礼とパフォーマンス 岩原書店
- 生駒知子・志村明彦 (1993). 英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー：『断り』という発話行為について 日本語教育 79, 日本語教育学会 pp.41-52.
- 宇佐美まゆみ (2011). 基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)
- 泉子・K・メイナード (1997). 会話分析 ころしお出版
- 吉枝聡子 (1994). Ta'arof 研究の現状とその問題点—社会言語学的視点から— オリエンツ 37-1 (19) pp.87-103

<sup>i</sup> 2013 年度国際交流基金の地域別情報, 国際交流基金の公式サイトから

<sup>ii</sup> (1) Lohat-name-ye Dehkhoda (1947-80) : 互いを知る/認める, 今日では, 対面の際の歓迎の挨拶/親交や機嫌伺いの表現, パーティに招待する, また贈り物をする. (2) 黒柳恒男『ペルシア語辞典』(1998) : 儀礼的な挨拶(言葉)/儀礼, 贈り物, ベっか/お世辞/追従